
闇と光と笑いと恋

冬空奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇と光と笑いと恋

【Nコード】

N3546K

【作者名】

冬空奏

【あらすじ】

あの光と闇の恋がかえってきた！

笑いあり、ほのぼのあり、涙？ありのどたばたコメディ小説！

初めの挨拶！（前書き）

さてさて、二回目です。

エル「本当にか！」

挨拶だけでも（汗）

ルカ「頑張りましょうね！」

ええ！

初めの挨拶！

「つーことで、光と闇の恋第2部つてわけだな」

「みたいですネ。タイトル逆さまにしたただけなのに…」

まーまー、いいじゃないか（笑）

分かりやすいしさー（笑）

「まあ、作者さんの手抜き度がよく分かりますよね」

「ルカの言つとおりだな」

ちよ、攻めないで（汗）

さてさて、オープニングコール？タイトルコール？どっちなのかね

…。これ。

「まだ、この小説の中身にまで入ってないんですよね？」

一応そうなんですよ。

これは、最初のご挨拶みたいなものなんで。

「つかさー、エルと俺だとどっちがどっちかわかんないか？」

「たしかに。これは一人称などを変えるべきではないのか？」

うーん…。まあ、本編の場合大丈夫でしょう！

たしかに、わかりにくいのはあるかもだけど…。

「まあ、大丈夫か！」

「大丈夫なんじゃないかな？」

多分ね、ブラが乱暴な口調で中々出番ない人で・・・。
エルがね、少し優しい口調で意外にも出番が多い人なんだと思うよ。

「うぐ…言い返せないな…」

「一番出番多いのは、ルカか（笑）」

まあ、そういう事になりますよね（汗）
あの人は扱いやすいんですね。

「まあ、敬語キャラだかな」

「まあまあ、別にどうでもいいじゃないですかっ」

そうそう（笑）

今後もそんな感じでやろうと思うしね。

「そうなのか…。まあ、いいけどな。」

「うーん、新キャラ登場！？みたいなのはいいのか？」

あー、あると思いますよ。

多分ネタ切れるし。

「ネタ切れちゃだめでしょ！」

あら、フィさんこんにちは（笑）

「おー、どうしたよ？」

「え…別に、挨拶に來ただけよ…勘違いしないでよね！」

「はいはい、ツンデレお疲れ様…」

「なっ！？ツンデレじゃないもんっ！！」

はいー、恋人同士のお話はそこまで…。

さてさて、改めて紹介といきましょうか…。

「ブラです。えーと、まあ…主人公みたいですよ…ええ」

「エルです！嫁要らずとかなんとか言われたり…本編には出てないけれど、ご近所さんと仲いいのは気にしないでください！」

えーと、私が作者の冬空奏です。

ダメ作者ですがよろしくです。

「ルカと申します。唯一の敬語キャラやら…女性みたいなキャラと
か言われてます…」

「フィですっ！ヒロインですよっ、ブラの恋人ですっ！」

さあ、次々♪

カモンッ！

「サーナです。エルの妹です…」

「ラティです！無駄な役なんですけど、よろしくです！」

まあ、ざっとこんな感じですかね…。

ユキ君…。自己紹介するなら、私の足から離れようか…。

「ユツ…ユキです…。ルカおにーちゃんの弟です…」

すぐに、私の足に隠れない…。

さて、それでは…挨拶終了！

「よし、本編期待だな！」

ゴー！

初めの挨拶！（後書き）

改稿させてもらいました！

ブラ「他は改稿しないのにな」

うるさい！

今後もこの調子で、この小説だけ改稿させていただきます。

ルカ「まだ、話が少なからみたいですよ！」

…うぐ。

第1話：バースデーは盛り上がりが命（前書き）

さて、やっと一話だねー。

ルカ「さて、誰のバースデーでしょうか？」

さー、誰でしょう？

第1話：パースデーは盛り上がりが命

「んー、今日もコーヒーがおいしいな…」

「俺的には苦いのだが…」

今日も、朝のエルとブラの会話から始まる。

気持ちよさそうなエルに対し、ブラはすごく苦そうな顔をしている。

「この苦味のうまさが分からないという事は、お前はまだまだ子供
ってわけだな…」

「にっ、苦手な奴だって他にも居るっての!」

エルがニヤリと笑って言うと、ブラは顔を真っ赤にして叫ぶ。
いつもと変わらぬ平和な朝だ。

「まあ、落ち着いてください…ね?」

「分かった…ってか、何でお前もコーヒーなんだよ!」

「ちょ…痛いですっ!」

コーヒーを飲んでいたルカに、殴りかかるブラ。
ルカは泣きながら、腕を盾にして防いでいる。

「まあ、落ち着け…な?」

「コホン…しかし、あんな夢オチのお話で本編終わっちゃうんだも
んな…」

「作者は何を考えているんでしょうかね…」

「はいはい、すみませんでしたね!」

「屋根裏から言うな!」

まあ、作者がエルに怒られたわけで…。

あの終わらせ方をしたので当然だろうが…。

「しかし、暇だな…」

大体何かが起きるブラの言葉である。

そして今回も…。

ピンポン。

「はい…って、ルカっ!? 大変だ、エル! ルカが女に…」

当然のごとく、その後にルカに殴られる。

ブラはその場に、倒れこむ。

「コラ! しつかりと、謝りなさい! お友達でしょ?」

「え…あわわ、ブラさんごめんなさい!」

「い、いいけど…その人…誰?」

「えーと、百合 ゆり って言います」

倒れこんでいたブラが、百合にたずねる。

エルもブラも、あまりにも似ていてがくぜんとしている。

「とりあえず、中に入りますか…?」

「では、お言葉に甘えて」

エルの言葉に、反応してニコリと笑う百合。
ルカと一緒に家に入る。

「えーと、初めまして…ブラです…」

「初めまして、エルと申します」

「改めて初めまして、百合です」

のっけから挨拶合戦である。

ついでに、ルカはお茶を入れている。

「…で、ルカとはどうゆう関係で？」

「ルカの姉です」

大体予想はついていただろうが、そういう関係である。
今回は、エルとブラも予想が出来ていたらしい。

「へー…やっぱり、ルカのお姉さんだし女性っぽい感じが…」

「まあ、胸はまったいらですけどね」

笑顔で百合が言う。

とりあえず、これで茶の間は暖まったらしい。

ブラとエルもぎこちなくだが、笑っている。

「まあ、弟の姿を見たくて来たわけなんですけどね…」

「私じゃないです…よね？」

「いいえ、どちらもです！ユキもだからね！」

…という、百合の言葉で二階からユキが降りてきた。
やっぱりルカの後ろに隠れてしまったが…。

「ほら、ユキ出ておいで…」

「恥ずかしい…から…無理…」

まあ、ルカのお願いも断られてしまったわけで…。
次は多分…百合だろう…。

「ふえー、やつぱりゆー君は可愛いなーっ」

「ふえ！？ちょ…やめて…」

まあ、そんな抵抗もむなく百合に抱かれているのである。
笑っている百合にたいして、顔を真っ赤にしているユキ。

「あのー…一回落ち着きましたよ…ね？」

（1時間後）

「あー…お茶がうまい…」

「それは、俺も激しく同意…」

体力的に疲れているブラとエル。

まあ、これは仕方ないと思う。

「はぐ、ゆー君逃げちゃうの？」

「ぼっ、僕…おにーちゃんの方が好きだもん…」

「ひゅっ…うゅっ…」

「ほっ、ほら…百合姉さんっ…泣いちゃダメですって！」

「…もう…やだ…」

「それは、俺も同意…」

まあ、エルとブラはもう…死にかけているのはおいといて…。

泣いてる百合を必死になだめるルカ。
正直な所、いつも通りな感じもするが…。

「ユキ！百合姉さんに謝りなさい！」

「ふえっ！？でっ…でも…」

「謝りなさい！ユキがあんな事言うから百合姉さん泣いてるんだよ？」

「僕何もしてないもん…」

「したからこういう事になってるの！だから、早く謝りなさい！」

「僕は悪くないもん…」

「謝れって言ってるだろ！素直に百合姉さんに、謝れ！」

…分かつてはいると思いますが、ユキまで泣き出してしまったので
す…。

ブラとエルは、目の前のルカにおびえて部屋の隅っこに居る。

百合は泣いているので現状が分かっていない。

まあ、最悪の状態である。

「ふえっ…おねーちゃん、ごめんなさい…」

「ひぐっ…いいいいいよ、ゆー君は悪くないからね…」

泣きながらではあるが、素直に謝ったユキを百合はぎゅっと抱きしめた。

とりあえず、一件落着である。

「んー…やっぱ、姉弟とか兄弟とかっていいよな…」

「いや、俺らも一応兄妹とかそなんん居るからな…」

ブラの言葉に突っ込みを入れるエル。

まあ、そのとおりだから仕方がないだろう…。

「そういえば、百合姉さんの誕生日って今日ですよね？」

「え、バレた？」

「ふつーに、バレてますよ…」

びつくりしたような顔で言う百合にちよつとあきれたような顔で言うルカ。

基本何もなしにくる事なんてないだろうから分かるのだろう…。

「えっと、何歳になられたんですか？」

「あ、俺も気になるな…」

まあ、この小説のバカ二人組の質問である。

基本的にエルは同意しからないのでまだマシかもしれない。

「んー、今年で…28位だよ？あははー、おばさんだよねー…」

「いやー、きれいで可愛らしくて素敵だと思いますよ？」

「えへへ、ありがとうね…ルカにも言われた事ないから…嬉しいよ…」

頬を紅潮させて百合が言う。

ブラは、お世辞が上手なのか上手じゃないのか…。

「これ、せめてものお礼でいいかな？」

「…」

まあ、反応的に分かるかと思うがブラの頬に百合がキスしたのである。

最近この作者そういうの多くない？なんてのは、気にしてはならない。

「とりあえず、そろそろ終わりの傾向かな？」

「みたいですわねー。それでは、全員で言いましょう…。」

「ハッピーバースデー、百合っ！」

まあ、バースデーの時は呼び捨てになるのはやっぱり仕様である。
とりあえず、楽しいパーティーをしたとき…。

T H E E N D

第1話：バースデーは盛り上がりが命（後書き）

いやー、それにしても…やっと更新だねー。

ルカ「本当ですよね。あの夢オチの話から…」
百合「うんー、あの夢オチは酷いよねー」

うぐ…、すみませんね…。

それでは、次回も頑張ります！

エル「他の小説の更新もしろよ」

あいあい…。

第2話：エイプリルフルちょー大大だーい作戦！前編（前書き）

エル「今回はエイプリルフルネタか…」

そういう事ですねー。

エル「さて、今回の詳細は？」

「↑は小声です！

」↑は全員の異口同音のかっこって事で宜しくです！

エル「それではー…」

どうぞー！

第2話：エイプリルフルちょー大大だーい作戦！前編

季節は春。

桜が綺麗に咲き、新たな出会いや別れがある季節。

そんな桜とはカンケーなく…今日も、あの舞台から始まり始まり…。

「そつえば、エイプリルフルだな」

「そつだな」

「という事で、嘘をついたりしようじゃないか…」

説明しよう。

こつちの世界では、今日がエイプリルフルなのだー。

まあ、作者の都合でそうしているだけである。

「でもさー、ブラ君…どんな嘘をつくんだよ？」

「嘘について、知り合いを泣かしていこうじゃないか…って、いう嘘だよー」

「うわ…ひつど…」

「いいじゃないか。エイプリルフルなんだもの」

「まあ、暇だしいいとするかーっ！」

最終的にやってしまうのがエルである。

という事で、エイプリルフル企画…。

知り合いを嘘で泣かしてしまおう大作戦が始動されたのである。

「…ブラ、誰からやるんだい？」

「じゃあ、まずはユキ君からでいこうかつ！」

「子供泣かせるとか酷いなー…まあ、いいや！」

負けてるエルも、エルである。

ちなみにルカは、春の大バーゲンのチラシを見てデパートまでずっと行っただと…。

それでは、まずはユキから…。

「ユキ君ってさー、バカだよねっ」

「ふえっ！？ばっ、バカじゃないもんっ！そりゃあ…頭はそんなに良くないけど…」

ブラの笑って言った言葉に、早くも涙ぐんでしまつユキ。
必死？な反論をする。

「でも、ホラ…バカじゃんっ」

「バカじゃないもんっ！」

「バーカバーカ」

「ひぐっ…うわあああんっ！ブラおにーちゃんのバカあー！！！」

そう言っで、泣きながら走っていくユキであつた…。

あはは、と笑っているブラなのであつた。

「よ、っと…捕まえたつと…」

「はっ、はなしてよっ！！」

「痛い痛い！暴れないでっ！」

「あう…ごめん…」

「いいよ、いいよっ」

泣いてるユキに対し、笑顔でずっと話しているエル。

まあ、エルらしいっちゃエルらしい。
ちなみに、ユキがエルの腕の中で暴れたのでエルの腹に足が当たったようだ。

「今日は、エイプリルフルだからあんな事言ってるだけなんだよー?」

「あぐ、そうなの?」

「そうだよー、だからねー…という事だよー」

「…ん、分かった」

「よしよし、いい子だねーっ」

笑いながらユキの頭をなでるエル。

ユキはえへへと笑っている。

ちなみにエルは、内緒話をしたけど、内容は秘密である。

「…で、次は誰をするのかな?」

「んじゃあ、何か楽しそうなので…フィで行こうかな!」

「がんばれよー。」

(ひっでーやろうだなー…)

そんな事を心底思っていたエルなのであった。
たしかに、乙女を泣かせるのは酷いだろう…。

〈10分後〉

「はい、捕まえました…っ」と

「わわっ、はなしてよっ!」

「なんで皆同じ反応かねー…まあ、手ははなしますけど…」

さすがにー、と思って手をはなすエル。

そこら辺については、紳士なので分かっているであろう。

「…で、フィさん…泣いてるのはなぜですか？」

「だってー…ブラがー…ブラがー…私を淫らな子って言っただもん
っ…違うのにー…」

「その件についてはですねー…というわけでございます…」

「ブラめえ…っ！絶対に許さないんだから！」

「だからですねー…という事を…」

「…分かった。じゃあねー、ありがとう」

「気にしないで下さい」

会話が多いのはご愛嬌です。

そして、フィには敬語のエルなのであった。

ずっと、泣いてるフィに対して優しく接したつもりなのだろう。

「さて、次は誰にするんだい？」

「やっぱり、百合さんとル力でいくかな…」

「ん、じゃあ頑張ってねー」

ル力はデパートから帰ってきて、こたつに足を突っ込んで座っていた。
たようだ。

百合も、こたつに足を突っ込んで座っている。

言ってしまうば、超くつろいでる雰囲気である。

まあ、このくつろぎの間に悪魔が来る…みたいなものなのだろう。

「んーと、何か作者が面倒そうなので…この泣かせる話はカットで
ー」

すまんねー…無気力な作者で（汗）

まあ、時間短縮ー…と。

（１０分後）

「ホラ、お二人さん泣かないのー!」

エルがルカと百合に話しかける。

今回の嘘は、ブラの姉が死んだー・・・的なお話である。
恐ろしい位分かりやすい嘘な気がする。

「お二人さん、あれは嘘なんだよ?」

「・・・え、エルさん・・・本当ですか?」

「えっ、エル君・・・本当なのかな?」

「こつちに関しては本当です!」

エルは、しつかりと主張して言った。

二人は、まばたきをくりかえしている。

信じているのか・・・信じていないのか微妙な所だ・・・。

「なので、仕返しをしようか・・・って事でございますが・・・協力してくれるかな?」

「「いいともー!」」

ルカと百合は、手を突き上げて二人同時に言う。

これで、今までの会話の・・・の中身が分かったであろう。

嘘なら、嘘で仕返しをしようと・・・という作戦なのだろう・・・おそらく。

「よし、ブラは冬場原までお買い物だ・・・では、作戦の内容を
発表しよう・・・。」

では、私がメンバー等の説明をしよう・・・。

メンバーは、フィ、ルカ、百合、ユキ、サーナ、ラティ、アキ、バク、ミロ・・・そして、エルである。

ちなみに、ミロはブラの姉である。

アキとラティは、ラティオスとラティアスである。

忘れてたと思うので、作者からの補足である。

「さて、作戦の説明だっ・・・ユキが死んだっていうシチュで演技をする・・・。」

「演技内容はじゆうなのよねー?」

「はい、演技に関しては自由です!役の説明については作者がしてくれるさ!」

あ・・・私もメンバーなのね(汗)

『そついう事ーっ!』

全員で言うんですか・・・(汗)

はい、説明しましょう・・・。

役は・・・サーナが医者で、私が住職かな?その他はそのまま黒服で・・・自由にとの事です。

「ほう、本当に自由だなー・・・なあ、アキ?」

「そうだねー、結構楽そう・・・!」

「どれだけ、単純な演技でも・・・魂を注ぎ込んでアレに仕返しをするのです・・・!」

「涙はどうするのー?」

「目薬や水を使います、後は皆様の演技しだいです!」

「僕は、どうしたらいいのー?」

「目をつぶってユキ君はじっとしてたら平気だよ?」

こんな一問一答が続く事、30分・・・。

「それでは、皆さん準備はおつけーですかー？」

『おつけーです！』

「では、これからが本番です・・・いきますよ！」

『おー！』

此処で、エルと皆で固まって団結を高める。

「ただいまー。」

「仕返し作戦・・・始動です・・・っ！」

そのエルの一言で全員立ち位置につく。

これから・・・始動するのです・・・っ！

T H E E N D

次へ続く・・・。

第2話：エイプリルフルちょー大大だーい作戦！前編（後書き）

今回は、後編でございます（分かってるよ

エル「とりあえず、次にどこまでの演技かが分かるんだな・・・。」

まあ、アレな事になりそうだけど・・・。

エル「恋愛の要素もいれてくれよ?。」

あいあい（笑）

第3話：エイプリルフルちょー大大だーい作戦！（後編）（前書き）

ふう・・・5月だ・・・。

エル「エイプリルフルネタなのにな・・・。」

うっ、うるさいいいゝ（泣）

ルカ「それではどうぞー！」

第3話：エイプリルフルちょー大大だーい作戦！（後編）

此処で、前回のあらすじなのです！

桜の咲き乱れる春・・・そんな季節に、ブラは嘘をついて知り合いを泣かせようとの作戦を実行。

そして、エルもそれに参戦！

・・・と、思ったのだがエルは実は違う作戦を考えていた・・・それはなんと・・・仕返し大作戦なのであった！

そして、仕返し大作戦は・・・エルの一声により、今・・・始動する・・・。

「ただいまー・・・って、皆そろって何やってんだよ!？」

「ブラ・・・ユキがな、さっき息をひきとったんだ・・・だから、皆で集まってるんだ・・・。」

驚いてるブラに、エルが悲しげな目で事情を説明する。

やっぱりリーダーだけあって演技は中々のものだ。

ちなみに、全員黒服である。

「は？どうせ、エイプリルフルのネタだろ？」

「ブラのバカ・・・っ！自分の友達の弟が死んだのに何でそんな事言うの!」

「フィさんの言うとおりだよ・・・。私・・・こんなやつが弟なんて、姉として恥ずかしいよ・・・。」

笑って言うブラに、フィが涙目で少し怒りながら言う。

さらに追い討ちをかけるように、ミロが泣きながら言う。

これには、ブラも心に矢を刺されたような事になっている。
やはりミロの一言が大分いったのかもしれない。
普段は適当で陽気なブラだが今回は・・・しゅん、としている。

「ほら、早く着替えてきなさい！姉からの命令です！」
「うう・・・は、はい・・・。」

ミロがキツくブラに言う。
ブラは泣きそうになりながら二階へあがっていく。
フィは、少しだけ笑っている。

「ミ、ミロ姉・・・着替えてきたよ・・・。」

「はい！着替えてきたならしっかりと自分の立ち位置につく！ブラ！泣いてても何にもならないから早く！」

「ひぐつ・・・はい・・・。」

（ブラって泣いてる時とか、キツく指導された時って可愛いんだな
！・・・。）

「ん、フィさん・・・どうかしました？」

「え・・・んーん！なんでもないよー！」

「顔が赤いけど・・・まあ、予想がつくので詳しくは聞きませんっ。」

「・・・。」

ミロとブラのやり取りを見ていたフィが心の中でつぶやいた。
胸キュンしてしまったらしい。

まあ、そんな所でエルに言われて顔を紅潮させてしまったのである。
エルは少し笑ってそのまま立ち去った。

フィは顔を紅潮させたまま、黙りこんで自分の位置に戻った。
ブラは泣いたままである。

ちなみに他の皆は必死に笑いに耐えている。

「ユキ・・・本当に死んじゃったんだな・・・ごめんな・・・エイ
プリルフルの嘘とか言つて・・・。」

「ユキ・・・なんで死んじゃったの！？まだお兄ちゃん、さよなら
もありがともいえてないよ・・・。」

くしゃくしゃの表情で泣きながらル力が言う。

普段、感情を出さないル力なので此処までいくのは珍しいだろう。

ブラはそれを見て、心を痛めたなんてのは当たり前すぎる事だろう。

「あなた、これは本当の話なんです。嘘じゃないんです・・・現実
なんです。」

ブラに医者^{サーナ}が言う。

医者のお話なので、説得力がある。

余談だが、とても白衣はサーナに似合っているので本当にバレにく
いと思う。

どこぞの美人ナースみたいになっているのは仕様である。

「ですよね・・・今更後悔したって遅いですよね・・・すみません
・・・。」

「ユキ・・・本当にごめんなー・・・。」

ル力が顔をさつきより曇らせて泣く。

ブラが、心を痛めてさらに泣く。

「それでは、背の高い方からご焼香お願いします・・・。」

まあ、お葬式や通夜ではないのだがとにかくご焼香である。

作者はお葬式や通夜などにあまりくわしくないのだ。

「なんだかんんだで30分」

「ユキ・・・ユキい・・・。」

「ブラのバカっ！」

そう言つて、涙ぐみながらフィはブラの頬をひっぱたく。
他の皆やブラは啞然としている。

「最初から皆を信じてよね！何が冗談よ！！ブラのバカっ、大嫌い
！！！」

そう怒りながら言つて、フィは部屋にこもつた。
ブラはポカーンとしている。

「ブラ・・・残念だつたな・・・。」

「・・・何がだよ・・・。」

「エイプリルフールの冗談にひっかかつちやつたんだもんね！」

「な・・・っ！」

エルやユキやサーナや他の皆は大爆笑している。

ブラは顔を真っ赤に紅潮させている。

フィに関しては発狂しているのかと聞きたいほど一人で笑っている。

「フィ・・・お前なあ！本気でフリーズしちゃったじゃねーか！！！」

「まあまあ、これで許してくれる？」

そう言つて、フィはブラに口付けをする。

ブラは顔を真っ赤にする。

無論、フィもブラもファーストなのである。
ブラ、19歳ではじめてのキスの巻である。

「・・・おう、許してやる・・・。」

「そう・・・良かったっ。」

フィが微笑んで言う。

ブラは、キョトンとしている。

なんだかんだで今日も一日平和だったのである。

「今日も楽しくて平和だったな！」

「ですね！」

何がともあれ、愉快的仲間達のおかげで今日も平和だったのである。
この調子で、こんな平和な一日がだんだん過ぎていけばいいな・・・。
なんて思うエルなのであった。

T H E E N D

第3話：エイプリルフルちょー大大だーい作戦！（後編）（後書き）

ふええ、疲れた・・・。

ルカ「お疲れ様です。」

次回も頑張らないと・・・。

エル「そうだなっ。」

それでは！

第4話：「ユキの日記と秘密の愛情」？」「（前書き）

さて、やっと完成したわけで・・・。

エル「今回は、誰がメインなんだ？」

ル力達のメインのお話だよ。

ブラ「主人公なのに俺は影薄くね？」

気のせいじゃないかなー・・・。

エル「そうだな、一応全部の話に出ているからなー」

そうですねー！。

ちなみに、『』は小声を意味します！（今回は）
それでは、どうぞー！

第4話：「ユキの日記と秘密の愛情」(?)

「ん、どうしたのユキ？」

「あ……のね……お兄ちゃん……」

突然、ユキがルカの服を、ぐいぐいと引っ張る。
ルカは、それに不思議そうに応答する。

「これ……な、何を書いたら……いいの……かな？」

「んー、どれどれ？」

ユキに、ルカが見せられたのは、日記だった。

ユキが言うには、夏休みの宿題なんだそう。

夏休みの全部の日にち分のページがあつたので、中々厳しそうだな、
と思ったルカなのであつた。

「そうだねー、その日に起こつた出来事を書けばいいんだよー」

「あ、ありがと……」

そう言つてユキは、自分の部屋へと走り去つた。

身内に話すときぐらい、恥ずかしがらなくてもいいのに……。
そんな事を思いながら、笑つてユキの方を見ているルカだった。

「ふうん、ユキの日記ねえ……。全部出来たら見てみるかな」

「それも楽しそうですねー」

百合とお茶を飲みながら、ルカが雑談をしている。百合の悪趣味な意見に、笑顔でルカは同意をする。だって、本当に楽しそうなんですもの……。なんてことは、口に出せないルカなのであった。

・・・そして、待ちに待った8月の夜。

ユキやブラ達が寝静まった夜、ある一人の男？がユキの日記を覗きにやってきた……。

「弟の日記を拝見するのも、兄の役目ですよね……」

そう言つて、ルカはユキの日記を自分の部屋に持ち去った。そして、蛍光灯の電気スタンドのスイッチをつけ、少し笑ってユキの日記を開いた……。

くユキの日記く

7月25日 天気：晴れのちくもり

今日は、ルカお兄ちゃんと、ブラおにーさんが喧嘩をしていました。喧嘩の理由は、ブラおにーさんがルカお兄ちゃんの服を全部隠して、メイド服だけにしたからです。

ルカお兄ちゃんは顔を真っ赤にして、メイド服を着て怒っていました。

ブラおにーさんは「じゃあ、何で着てるんだよ？」って言うてまし

た。

それにルカお兄ちゃんは「着るものが無いからです!」と言って反論していました。

結局、ルカお兄ちゃんが「いつも泣くのは私ばかり・・・」と言って、泣き出してしまいました。

ブラお兄さんは、あせりながらルカお兄ちゃんの方に言って、謝っていました。

その時、ルカお兄ちゃんの目が赤い輝きを放ち、すごい速さで、ブラお兄さんにパンチを入れました。

ブラお兄さんは、その場にうずくまっていました。

ルカお兄ちゃんの第2人格が目覚めたみたいで、とても怖かったです。

「・・・ブラさん、ごめんなさい」

7月26日 天気：雨

今日は、エルお兄さんが、一緒に遊んでくれました。

エルお兄さんは、とっても優しくていい人です。

・・・お兄ちゃんほどじゃないですが（小文字）

普段は、ブラお兄さんの相手になって色々していますが、今日は僕の相手をしてくれました。

エルお兄さんは、家のお母さん^{うち}みたいな人で、いつもエプロンをしています。

一緒に遊んでくれることは、少ないので、とても楽しかったです。
・・・でも、ルカお兄ちゃんの方が好きです、失礼かもしれませんが（小文字）

「・・・ユキ、私の事そんなに好きだったの？・・・あれ、涙が・・・」

7月27日 天気：晴れ

今日は、リュウお兄ちゃんが来てくれました。

リュウお兄ちゃんは、ルカお兄ちゃんのお兄ちゃんです。

そして、ゆりお姉ちゃんの双子の弟です。

リュウお兄ちゃんは、昔の話を僕にしてくれました。

「昔は俺も有名だったんだぞ」とっていました。

でも、個人的に歴史は嫌いなので、話の途中で寝てしまいました。

そして、僕が起きたら、リュウお兄ちゃんが、隣で寝ていました。

ルカお兄ちゃんはどっちも寝ていると思っていたのか、やっぱりメイド服でした。

今回は、ゆりお姉ちゃんにさせられてたみたいです。

よくこういうルカお兄ちゃんを見るけど、本当にかわいいのでほれてしまいそうになります。

「よく頬を染めてもじもじしてるけど・・・そこもあるのね・・・」

7月28日 天気：くもり

今日は、ルカお兄ちゃんと二人きりで留守番でした。

ルカお兄ちゃんは、何でもしてくれるけど、どこか厳しい人です。

いつも笑ったり泣いたりだけど、一度も苦しい顔を見たことはありません。

ルカお兄ちゃんは僕に、ブラお兄さん達との出会いを教えてくださいました。

二人は、高校で出会ったそうで、今とあまり変わっていないそうです。

そして、ルカお兄ちゃんはカッコいい(?) しかわいいのに、恋をしたことがないそうです。

告白をされたことも無いそうです。

「私には恋愛感情なんて無いから」と言って笑っていました。

さみしくないの? とたずねたら、「私には皆が居るからいいの」と言ってにっこりと笑っていました。

きつと、ルカお兄ちゃんが一番心安らぐ場所は、この家だと思います。

いつも元気に明るく、皆で何事もなく(?) 過ごせるこの家が好きなんだと思います。

こんな調子で、皆が帰ってくるまで話をしていました。

「ええ、私はこの家無しでは生きれないと思います・・・ユキ、よく分かったね・・・」

7月29日 天気：晴れ

今日は、ルカお兄ちゃんと喧嘩をしてしまいました。

喧嘩の理由は、僕のおやつをルカお兄ちゃんが勝手に食べちゃった

からです。

今思えば、とてもしょぼい喧嘩だったと思います。

その時、僕は部屋にこもっていたから知りませんが、お兄ちゃんはずっと泣いていたそうです。

僕がずっと部屋に居た時、百合お姉ちゃんが「早く来て!」とあせりながら言っていました。

そう言われたので、付いて行ったらお兄ちゃんがブラお兄さんとエルお兄さんに止められていました。

何事かと思つて、お兄ちゃんに聞いたら「ユキ、ごめんね・・・死んでお詫びするね」と言っていました。

僕はお兄さん達と一緒に、なだめたり、止めたりしました。

その結果、なんとかお兄ちゃんを止めることに成功しました。

お兄ちゃんが「ごめんね・・・何でもするから許して・・・」とうつむきながら僕に言いました。

それで僕は「じゃあ、僕のお兄ちゃんのままですつと居て」といいました。

そう言ったらお兄ちゃんは泣きながら「分かった・・・」と言ってぎゅっと抱きしめてくれました。

とても嬉しかったです。

「・・・これから、兄として居よう・・・ユキ、日記だからいいけどもっと台詞詰まってるたよね？」

7月30日 天気：曇り

今日は、ブラお兄さんとアニメを見ました。

何をするわけでもなく、ただじっと見ていました。

ルカお兄ちゃん何処なのかなー・・・。

「うわぁ、短い・・・主人公はブラさんなんですけどねー・・・」

7月31日 天気：晴れ

「そうだ、プール行こう」というエルお兄さんの一言で、プールに行きました。

プールは案外深くて、全く足がつかみませんでした。

お兄ちゃんに助けてもらいながら、楽しみました。

ブラお兄さんは、おぼれかけていましたが、エルお兄さんに助けて

もらってました。

とりあえず、片方が助けられているというようなプールでした。

でも、お兄ちゃんと密着できてうれし（消した後）

とっても楽しくて、本当によかったです。

いろんな意味で泳ぎに集中できなかった（消した後）
本当に楽しくて、エルお兄さんにも感謝です。

とりあえず、7月を通して分かったのは僕がお兄ちゃんのことをダ
イスキだってことでした。

他はあまり分かりませんでした。

「私だってユキのこと・・・だいすく」

「お兄・・・ちゃん、僕の日記知らない？・・・あ、お兄・・・ち
ゃん？」

ルカが、つぶやこうとした瞬間、ユキが部屋に入ってきた。

ユキは、字で自分の日記と判断したらしい。

「ふえっ!?!?・・・うう、ごめんなさい・・・」

「お、お兄ちゃんのばかぁ!!」

「・・・消した後とか、すごい写ってたよ・・・」

「にゃああ!!!!・・・お兄ちゃんなんか・・・大嫌いっ!!」

普段小声のユキが、顔を真っ赤にして泣いている。

少々怒っているようで、ル力はたじたじである。

「・・・ごめん」

「・・・いいよ」

うつむいて謝るル力に、心打たれたのか、少し間をおいて許してくれた。

ユキは、こういうのを萌えと言うのだと、悟った。

『そんなお兄ちゃんが、大好き・・・』

「ユキ、何か言った？」

「・・・んーん、なんでもない・・・」

ユキが小声で言った後に、ル力がたずねる。

ユキは動揺しまくって、顔を紅潮させて言った。

でも、ル力は本当はユキの言葉を聞き取っていたのだった。

少しだけ、ル力も頬を赤らめていた。

「男の子のハートも奪い取るなんて、ル力ってばすごいねー」

「奪ったつもりは一寸も無いんですけどね・・・」

そんな事件の後、百合と二人で話をしていた。

百合は、うらやましがる目でこちらを見ていた。

・・・少し恥ずかしいよ・・・。

「ま、私もユキのことはスキだからいいんです」

そんな言葉を言って、ル力はその場を去っていった。

百合はやれやれという表情で、ル力を見ていた。

T
H
E

E
N
D

第4話：「ユキの日記と秘密の愛情」？「」（後書き）

ルカ「きれいにまとめてくださいよ・・・」

ごめんね、ちょっと参ってて・・・。

エル「そうだなあ、もうちょっと頑張ってほしいな」

すみません・・・。

第5話：伝説的なゲーム（前書き）

ルカ「さて、更新ですねー」

うん、本当にお久しぶりだね。

エル「今回は、伝説的なゲームか・・・」

その伝説的なゲームについては、もう分かるかな？

ブラ「おうよ！」

それでは、どうぞー！

ルカ「どのゲームですかねー？」

第5話：伝説的なゲーム

「だあゝ！！分かってねえよ！全然わかってねえよ！！」
「いや、絶対にポケモソはこっちのが楽しい！」

静かなはずの和室に、怒声が飛び交う。

青筋をたてて力説をするブラとクラークン。

お互いにポケモソのことについて話しているようだ。

少しアレなため、ポケモソなのは無視の方向で行こうと思う。

「お二人さん、どうしたんだい？」

「エル、こいつはポケモソを全然分かってねえんだよ！」

「何を！！分かってないのはお前の方だ！！」

「分かったから、話を聞かせてくれない？できるだけ、普通のトーンの声と大きさで」

お茶を持ってきたエルに、突然話しかけるブラ。

とりあえず、エルはお茶を二人の前において、呆れながら話を聞くとしている。

クラークンも、負けじと声を張っているので、エルが一言付け加える。

この一言で、さっきまでの怒声が嘘のように静かになった。
だが、まだ二人の怒りがおさまったわけではないようだ。

「あのな、やっぱりポケモソってのはさ、純情にやっていくものだと思うんだよ」

「否！改造してこそ、面白いものがあるんだ！」

「あれは、純粹にやっていくから楽しいものが！」
「はい、ストーップ」

どうやら、二人の議論はポケモソは純情にするのが面白いが、改造が面白いかのようだ。
だんだんと白熱していったが、エルの一声によりかき消される。

ちなみに、作者的には純情にするのが一番面白いと思う。

ブラが純情派、クラーケンが改造派のようだ。

最近、作者の周りでも意外と話題になっている議論なのである。

「そうだねー、俺は純情派かな」

「だよな！ほら見る！！」

「くそっ！弱いポケモソの何処がいいんだ！？強靱な能力があつてこそ、楽しいんだ！」

「まるで分かってないな。そんな奴には、ポケモソをする資格はない！」

ブラが優勢な立場に立ったからか、クラーケンに攻撃を開始。
しかしクラーケンは、強気な姿勢を壊してはいない様子だ。

エルは、やれやれというような表情で、二人の争いを見ている。
どうやらエルは、この議論に今のところ全く興味がないようだ。

「な・・・っ！貴様、何を言うか！」

「心金・魂銀の4人目の四天王が言っていたことを覚えていないのか！？」

「四天王さんは何て言ってたの？」

「強いポケモソ、弱いポケモソ、そんなのヒトの勝手」

「本当に強いトレーナーなら、自分の好きなポケモソで頑張るべきだと！！」

「ん、確かにそのとおりだねえ・・・」

エルもようやく、興味を示し始めた様子。

クラークンは、全くといっていいほど抵抗が来ていない。

ちなみに、四天王のヒトの台詞については、これっぽいことなのだが、台詞は多分合っていないだろう。

でも、このヒトの言ってた事は本当に正しいと思う。

個人的には、好きなポケモンを育てていく人なので、マイナーとか言われても全く気にしない。

今のマイブームは、ドータクンとフォレトスであるが、友人に馬鹿にされてしまった・・・。

「はっ、それで勝負に勝てるだけでも？最後にモノをいうのは、無論、能力だ！」

「異議あり！たとえ相手が強くても、相棒を信じる気持ちがあれば、どんな壁も突破できるんだよ！」

「いいや、できない。固体値や努力値を考えてこそ、ポケモソは成立するのだ！」

「そんなことを考えてプレイしたポケモソに面白さを感じられたのか？！」

「おう、感じられたね！実に楽しかった！」

だんだんと、最初の議題からはズレていって、違う議題になっていた。

エルは、興味深そうに二人を見ている。

そして、エルは二人の瞳に注目した。

ブラの瞳は、純真無垢の少年のような輝いた目をしている。それに比べてクラークンは、どす黒い犯罪者のような瞳だ。少し、性格がひねくれると、瞳にそれが出てくる。

瞳とはなんて正直なものだろう・・・。

そうエルは悟ったという。

「じゃあさ、クラーケン・・・昔、何も知らないでプレイした時のことを思い出してごらん」

「昔か・・・俺がまだ、マグマラシの頃だな・・・」

エルが、優しい口調でクラーケンに話しかける。

クラーケンは素直に、昔のことを思い出す。

く昔く

親から初めてゲームを買ってもらった。

それが、「ポケモン」との出会いだった。

俺はとても興奮していた。

友達が皆持っていたが、俺には高嶺の花だったものだからだ。

俺は、カセットを差し込み、GAMEMANアドバンスの電源を入れる。

横のスイッチをカチャリ、とつめで上にあげる。

そうすると、画面には幻想的な虹色で「GAMEMAN」と大きな文字で表示されている。

そして、その下には灰色の地味な色で「Nitttenbo」と小さな文字で表示される。

この時、StartとSelectのボタンを同時に押ししまい「Nitttenbo」の文字が消えた。

「ふええええ！！ゲームが出来ないよぉ！！」

とか言つて、泣き叫んでたなあ・・・。

親がすぐに解決してくれたつけ、少し恥ずかしい・・・。

そして、目の前にはモノクロなのか分からないような色の、粗いド

ットが映し出された。

当時の俺には、夢のような光景だった。

俺は目を輝かせて、次々とキャラを設定してゆく。

そして、純粹に草むらに入って初めて会うポケモソを捕獲してゆく。

ポケモソが進化したとき、本当に嬉しかったなあ・・・。

ジムリーダーに負けたとき、悔しかったなあ・・・。

でも、もう一度やろう！って気になった。

その後に勝った喜びは、言葉では表せない位嬉しかったなあ・・・。

殿堂入りした時、あの時は泣いてた・・・。

それ位、嬉しかったんだよ。

「終了」

「どうだった？」

「・・・いつからだろうな、こんなに俺が汚くなってしまったのは・

・・・」

「俺の負けだよ。俺はまた、純情にポケモソをしたくなった」

「ようやく、分かってくれたな。やっぱり、純情にするのが一番な

んだよな！」

「おう・・・そうと決まれば、俺はまた改めてポケモソをしてくるぜ」

そう言っつて、クラークンは純粹な瞳で、ブラを見た後にゆっくりと自室へと戻っていく。

ブラは、笑顔でクラークンを見送る。

エルは後ろで、笑顔になりながらポケモソをしていた。

ま、後にブラのDSとカセットだったことが判明したので、エルも怒られたそうだ。

「まあ、めでたしめでたしですね」

「そうだな・・・って、ルカ！お前強すぎるんだよ！！また負けた

「じゃねえか！」

「じゃあ、私の方が相棒を信じる気持ちが強いのことで」

そう言つて、ルカはブラに笑いかけて、DSの電源を切る。

ブラは、ぎゃーぎゃー言いながらも、少し笑つて、またポケモソの育成をしている。

なんだかんだ言つて、すごく楽しめる全国共通のソフトだと思う。

「おい、ポケモソバトルしないか？」

「おう、お前には負けないぜ！」

「こつちも、望むところだ！」

クラークンが、ブラにバトルを挑む。

ブラは、快くその挑戦を受け入れる。

ルカとエルは、クラークンとブラの画面を後ろから覗き込んで、アドバイスをする。

やっぱり、何人でもいつまでも楽しめる伝説的なゲームだと思う。

今後も、ずっと続いてくれたらいいなあ……。

なんて、事を思っていた4人なのであった……。

THE END

to be continued...

第5話：伝説的なゲーム（後書き）

やっぱり、感動的にはいけないのがコメディですね（笑）

ルカ「このまま、私的にもこのゲームは普及してほしいです」

ブラ「・・・で、なんで「ソ」なんだ？」

いや、ポケモンがポケモンやるってのもあれだから・・・ね？

エル「それで、ポケモソと」

まあ、ポケモンと思って読んでいただければいいかなって思う。

ブラ「ちゃんと、改造しないで育てろよ！」

エル「そして、四天王の名言をしつかりと覚えておくんだ！」

それでは、次回ー♪

第6話：笑顔を絶やさない紳士（前書き）

さて、意外と早めの更新です。

エル「この調子で、他も更新してくれよな」

うんー、テスト勉強サボってたからそんなこと言わないで・・・
あっ（汗）

ルカ「ちゃんと、勉強してくださいね」

はい、明日はやります・・・（泣）

ブラ「それでは、見てくれよな！」

第6話：笑顔を絶やさない紳士

タイトルも変わり、割と更新の進む物語。

いつもはほのぼのとしている住宅に、ある事件が起こった……。

「ブ、ブラが誘拐されただってー!？」

「な、なんですってー!？」

静かな朝、家中にエルとルカの声が響く。

どうやら、ブラが誘拐されたという置手紙が置いてあったらしい。

誰かが誘拐された場合、なぜか置手紙を置いていくようだ。

文面は、どうせブラが誘拐されただけなので、読まないことにしよう。

「……ご丁寧に地図まで描いてあるな」

「面倒ですが、行きますか？」

「んゝ、コーヒー飲ませて……」

「あ、私も紅茶飲みたいです!」

主人公が居なくとも、いつもどおりの朝である。

これが、ルカがエルなら、こうはいかないだろう。

最近のニュースや、特番等の話をしながら、二人でゆっくりと過ごす。

時刻は8:30分、ブラが誘拐されたのを知ってから1時間が経過した。

なんともいたたまれない主人公である。

「よし、昨晚のおかずを持ってブラを助けにいくぞ！」

「昨晚のおかずは何に使うんですか？」

「いや、ブラと交換してくれるかなあ、と」

「なるほどー、昨日は筑前煮だったしいけるかもしれないですね！」

「それでは、地図の場所に直行だ！」

「おー！」

多少和やかムードの二人。

エルは筑前煮をタッパーにつめて、その他必要なものをカバンに入れる。

ル力は遠足にでも持っていくのかといいたくなるようなリュックに、必要な物を入れる。

これで、ブラを助けにいく準備ができたようだ。

ユキを助けに行くときと違い、荷物が多い。

そして、ムードが全く真剣ではない。

こんなことで大丈夫なのだろうか？

（20分後）

それらしい倉庫のある港に着いた。

地図によると、番号が「9-D」の倉庫らしい。

本当にそうなのかの保障は無いが。

エルはしっかりとノックをしてから、ドアを開ける。

倉庫の中から返事があったようだ。

「えと、アナタがブラを誘拐した主かな？」

「うん、そうだけど？」

「えと、お名前の方を聞かせてもらってもよろしいでしょうか？」

「僕の名前はシャルだよ」

意外と和やかなムードで、エルとルカはシャルに接する。シャルはどうやら、ウィンディのようだ。オレンジ色の体が、光に照らされてよく見える。割と悪い感じではなさそうだ。

「筑前煮と交換で、ブラを返してもらえる？」

「うーん．．．筑前煮は嫌いだなあ」

「じゃあ、おはぎでどうです？」

「もう一個くらい何かほしいなあ．．．」

「じゃあ、昨日コンビニで買ったいなり寿司をあげよう！」

「わーい！じゃあ、勝手に奥の方に取りにいつてー」

ルカとエルの活躍により、商談が成立したようだ。

どうやらブラは、奥のほうで拘束されていたようだ。

シャルは、嬉しそうにいなり寿司とおはぎを食べている。

エルは少ししよげているが、それは気にしない方向で行こう。

「おー、ブラー助けに来たよー」

「エル！これ以上近づくな！！」

「はあ？」

その忠告を無視して、ブラに近づいたとたん、たくさんの敵が目の前を覆いつくした。

さすがの二人も、少しだけ真剣になる。

とりあえず、いやいやでも戦闘になるようだ。

敵の数は、50〜60というところだ。

よく、倉庫にこれだけの人数が入ったなあ、と関心しているエルだった。

「此处で、貴様の命を絶やす！」

「ちなみに、青いのはもう捕まえたぞ」

「エルさん、助けてくださーい」

「よし、この敵部隊を殲滅するかな！」

そう言っただけで、カバンの中から料理道具達を出す。

どうやら、敵をこれで滅ぼすのだという。

ゲーム的に言うと、エルの装備は、三角巾、エプロン、調味料、調理器具である。

果たして、どうやってこれで敵部隊を殲滅させるのだろうか？

「かかれええっ！！」

敵部隊の司令官の掛け声で、いつせいに敵が動く。

エルは余裕の表情で、じっとしているようだ。

「落ち着きがないねえ、ほれっ！」

「ぬあっ！？」

そう言っただけで、エルは床に使い終わった油をまく。

敵は面白いように、滑ってこけていく。

エルはにやにやと笑いながら、フライパンを持つ。

これで、転んだ敵一人一人の頭を叩いていく。

敵部隊は、面白いように気絶していく。

「役立たずどもめ……！俺がやるわああ……！」

「あら、冗談通じない子が……ならば、こっちもするまでだ！」

そう言っただけで、ナイフを持った小ボスみたいな野郎がエルに向かってくる。

エルは普通の鍋を持って、それに立ち向かう。

そして、鍋の中に入っている激辛ソースを小ボスの顔をめがけてかける。

小ボスは、目にソースが入ったらしく、横たわって悶え苦しんでいる。

そして、小ボスの頭をフライパンで殴る。

これで、小ボスものびたようだ。

「うし、これでいいのかな？」

「甘いな、最後は俺だ！」

そう言つて、緑色のポケモンがエルの前に降り立つ。

大きな鎌に、微妙な羽・・・見たところ、ストライクのようなエルも、すこし警戒をしている。

「俺の名はダン！KWの一人さ！」

「おー、懐かしいなあ・・・」

「此処からは、命を懸けた殺し合いだぜ？」

「ふうん、そつちがやる気ならこつちもやる気で」

「おらああー！」

ダンは叫んで、エルの方へ向かつていく。

エルは「おお、速い」とか言つて、刀をかまえている。

そして、ダンがエルの目の前に・・・！

「ぐはっ！！」

「へん！やつぱり、この俺にはかなわねえんだよー！！」

その場に、エルが横たわる。

肩から大量の血を流し、倒れている。

「エル……！！！！！！」

「エルさん！！！！！！」

ブラとルカは、泣きながら思いっきり叫ぶ。
ダンは、笑いながらエルの亡骸を見ている。

「ん、二人ともどうしたの？そして、ダン君はなんで勝ったつもりになってるの？」

「え……？」

エルが、ダンの首元に刀を当てて言う。
ダンは青ざめた顔で、エルの方を見る。

「じゃあ、君は俺を殺すつもりみたいだから、俺も君を殺します」
「ギヤアアアアア！！！！」

そう言つて、エルはダンの顔と体を切断する。
倉庫には、たくさんの気絶したのと、ダンの胴体と首が転がっている。

エルは淡々と、ブラとルカを開放する。

「シャル君、じゃーねー」

「ばいばーい」

ルカとブラは、ショックで気絶しているようで、エルが担いでいる。
エルはシャルに別れを告げ、二人を担いで家に帰っていく。
そのときのエルは、少し笑っていたようだ。

（自宅）

「あれ、俺は何で此処に？」

「私も何でここに？」

二人が部屋を見渡して言う。

なぜ来ているのかは、分かっていない。

「エルが・・・死んじゃった・・・」

「うう・・・エルさん・・・」

「どうしたの？」

「え・・・？」

泣いている二人の背後に、嫁入らずのエルさん登場。

二人とも、はとが豆鉄砲を食ったような顔をしている。

エルは笑いながら、「実は生きてましたー」とか言っているようだ。

「エ、エルー!!」

「エルさん、びっくりさせないで下さいよ・・・」

「あはは、ごめんごめん」

エルは泣きながら抱きついてくる二人を、ぎゅっと抱きしめて言う。
いつもどおり、エルは笑っているようだ。

二人を見て、少し泣いていたようだ・・・。

THE END

第6話：笑顔を絶やさない紳士（後書き）

うん、すっごい頑張った。

エル「小学生並みの感想だな」

しかし、エルのキャラが段々変わってる気が・・・。

エル「そうかもなー・・・」

まあ、いいや♪

一同：よくねえよおお！！！！！！

ウボア！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3546k/>

闇と光と笑いと恋

2011年10月4日17時03分発行